

原爆の記憶

——広島と長崎での実地調査を通して——

西南学院大学
国際文化学部国際文化学科
19AR116 畠田莉沙

本研究は、原爆を実際に体験された方へのインタビューと実地調査を行った。主な研究内容は、①原爆の影響と被害、②被爆者へのインタビュー、③原爆に関連する資料館・展示会での資料研究、④被爆した建物や記念碑の巡検である。現地調査では、被爆された日本人の方と在日韓国人の方にインタビューや、博物館等で原爆の影響や第二次世界大戦の様子をパネルと資料で研究し、被爆した建物で現在も残っているものの巡検をし、関連資料の収集も行った。

研究の結果、被爆者の生の声を聞き、資料館で学ぶことで現実感が増し、過去と現在を照らし合わせることが出来た。また、戦争や原爆を繰り返してはいけないという被爆者の方たちの思いを実感することが出来た。それは今後の研究への刺激となり、原爆や戦争を繰り返さないためにできることを考え、学ぶことに繋がった。

原爆の記憶 広島と長崎での実地調査を通して

2016年10月作成
19AR116 畠田莉沙

目次

序論

第一節	研究の動機	1 頁
第二節	研究の方法	2 頁

本論

第一節	広島での実地調査	3 頁
第二節	長崎での実地調査	9 頁

結論

第一節	研究の成果	15 頁
第二節	今後の展望	16 頁
	参考文献	16 頁
	参考映像	17 頁

序論

第一節 研究の動機

現在、小学校から原爆や戦争についての教育が行われているが、数字や写真等、平面的な理解にとどまっているように思われる。第二次世界大戦が終結してから71年が経ち、広島市内に住む被爆者の平均年齢は80歳近くとなり、生き延びた21万人の生存者の数も2016年3月末現在では広島市では56,174人、長崎市では32,574人にまで減り¹、語り継ぐ者の減少が問題視されている。原爆の記憶を持つ人々の減少は、戦争や核兵器の凄惨さ

¹ 厚生労働省 HP「被爆者数（被爆者健康手帳所持者数）・平均年齢（平成28年3月末現在）」より引用（閲覧日2016年10月25日）。
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000049130.html>)

を風化させてしまうことになりかねない。そこで私は、被爆者の方々に直接お話を伺い語り継いでいこうと思う。

今年(2016年)4月、アメリカ国務長官のジョン・ケリーが広島平和公園を訪問し、オバマ大統領も5月の伊勢志摩サミットにあわせて広島を訪問する事が報道された時、日本人の若者の視点から見ると、「オバマ大統領が広島に来る」という事実として受け止めたが、世界ではこの行為は歴史的な出来事としてとらえられ、アメリカ側からすると日本に対する「謝罪行為」だとして反対する者も多いことを知った。アメリカにおいては原爆を「正当」とする声が多いものの、若者世代では「不当」だったと考える者も増えてきている。

さらに、私は小学生の頃に読んで衝撃を受けた『はだしのゲン』という漫画から派生させて研究したいと思う²。「はだしのゲン」とは2010年6月のgoo調査において「読んでおきたい日本史モノマンガランキング」で1位に選ばれおり³、実際に私は小学生の時に親に勧められて本書を読んだ他に、学校の平和教育の一環としてはだしのゲンのアニメを鑑賞した。目を背けたくなるような表現が多く、平和な現在の日本しか知らない私には現実味のないフィクションのように思えた。しかし、この作品は作者の実際の体験を元に書かれており、作中では原爆の残酷さの他にも、主人公の「ゲン」の家族・中岡家が「非国民」⁴として肩身の狭い生活を送っており⁵、同様に、近所に住む在日韓国人の朴という人物に対する差別も描かれている⁶。このように、被爆者といっても様々な方がいるため、「非国民」と呼ばれていた方、在日韓国人の方にもインタビューを試みたいと思う。また、広島とともに、長崎についても同様に実地研究を行う。

第二節 研究の方法⁷

近年、特に1990年代以降、近現代史の研究者たちの中で、オーラルヒストリーという研究方法が採用されつつある。それは、聞き取り調査を中心とし、文字媒体に残されていない経験や事実を掘り起こし、再現する試みである。本研究テーマに対してもこの手法を活用してみたい。つまり、現地でのインタビュー、展示の調査などを中心にして、残された記憶を文字化するのがこの研究の主な目的である。また、訪問地の様子なども訪問日ごとに整理して記録しておく。インタビューの際の証言者の方々の名前は、イニシャルを使用する。

今回、広島と長崎の様々な地を訪問することができ、日程的には前後しているが、地域

² 中沢啓治『はだしのゲン』[全10巻](汐文社版,1973-1985年)参照。

³ 「読んでおきたい日本史モノマンガランキング」引用。(閲覧日 2016年5月1日)
(http://ranking.goo.ne.jp/ranking/category/026/japanhistory_comic/)

⁴ 「国民としての義務・本分にもとる者。特に第二次大戦中、軍や国策に批判的・非協力的な者を非難していった語。」(明鏡国語辞典引用)。

⁵ 中沢啓治作『はだしのゲン 第1巻』(汐文社,1975)49,68頁参照。

⁶ 同上 60,69,70頁参照。

⁷ 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』(せりか書房,2002年)参照。

ごとにまとめることにした。また、今回の調査・研究は、文献研究を中心にした今後のさらなる研究のためのものであり、より詳しい文献の研究、検討は後日の課題となる。

本論

第一節 広島での実地調査⁸

「2016年8月6日 広島市」

平和記念公園にて平和記念式典に参列した。想像以上に人が多かったため、公園内の式典が行われている場所付近でテレビ中継されているものを見た。安倍首相らのスピーチを直接見ることはできなかった。式典には91カ国の海外代表らが参列しており、代表だけでなく公園内には多くの外国人が来ており、原爆投下は日本とアメリカだけの問題ではなく多くの国に関心を持たれている歴史的な出来事であったことを示している。

公園周辺と内部にはビラを配っている人、デモ活動を行っている人、警備のための警察が大勢いた。ビラでは「核廃絶」、「オバマ大統領の広島訪問」、「原爆慰霊碑を正す」、「第15回広島原爆と戦争展」、「憲法第9条の改正反対」、「改憲阻止の運動を呼び掛ける」、「江沢民が気功愛好家を大虐殺」、「日蓮大聖人の仏法」を訴えており、デモにおいても「核廃絶」「憲法第9条の改正反対」の声が多かった。

式典が始まり15分後に黙祷が行われた。多くの人々がいるにもかかわらず辺りが静まり返り、セミの鳴き声しか聞こえなくなった。その時に、71年前の同じ日のこの時間のこの場所で原爆が投下され一瞬にして14万人もの命を吹き飛ばしたと考えると恐怖でいっぱいになった。

この1年間で亡くなった広島の被爆者は5511人であり、被爆死亡者の名前を書き記した名簿は111冊、計30万3195人分になった⁹。広島市長である松井氏はオバマ大統領の演説の中の「私自身の国と同様、核を保有する国々は、恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない」という部分を引用した。しかし、実際には米大統領のその言葉に反して広島に「核のボタン」¹⁰といわれるものを持ちこんでいたことが指摘されている¹¹。

「第15回広島原爆と戦争展」においては、語り部になった被爆者の方（以下、Mさんとする）からお話を聞くことができた。その方は15歳で被爆をし、71歳になるまで自身が被爆者であることを家族にも話さなかったという。あまりにも残酷で、思い出だけでも苦

⁸ 山口彊著 『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』（朝日文庫、2009）参照。

⁹ 『中国新聞』2016年8月6日特報1面引用。

¹⁰ 『米大統領が司令部を離れたときでも、いつでも核攻撃の承認ができる「核のフットボール」と呼ばれる黒いブリーフケース』のこと（『原爆慰霊碑を正す』原爆慰霊碑を正す会発行、1面引用）。

¹¹ 『原爆慰霊碑を正す』（原爆慰霊碑を正す会発行、1面）。

しいため、胸のうちに封印しておきたかったためである。今回の研究旅行でお話を伺った他の被爆者の方々、皆さんが「今まで被爆したことは隠していたが、次の世代に語り継ぎたい、同じ思いをして欲しくないから」という意志を持ち始め、被爆体験を話してくださったが、このMさんもその一人であり、こうして語り部になられたのは、原爆資料館を訪れたことが契機であった。「何か役に立ちたい」という気持ちに駆られ、語り部の活動を始められたという。今の日本は大戦前と似通っている部分が多く、それは皆で止めなければいけないと訴えておられた。その他原爆ドーム、グランド・ゼロ、広島城を訪問した。

現在の日本は大戦前とどのような共通項があるのか。歴史は繰り返すと言うが、現在と大戦前の日本の状況に似通っている部分があるとすればそれを回避し、変えていかなければならないだろう。山崎雅弘著『戦前回帰「大日本病」の再発』(学研教育,2015年)において、安倍内閣発足前後で日本国内の様子が変わった点が以下のように指摘されている。

- ・人種差別や民族差別など、偏見と差別を堂々と主張する攻撃的・排外的な言説(いわゆるヘイトスピーチ)が増え、ネット上だけでなく路上でも公然と叫ばれるようになった。
- ・「日本」や「日本人」を礼賛する本やテレビ番組が急激に増加した。「日本人や日本文化は世界からこんなに賞賛されている」と、外国人の口から言わせる企画が増えた。
- ・政府や政権に批判的な人間への威圧・恫喝・見せしめのような出来事が増えた。
- ・近い将来の戦争や紛争への関与に備えた法案が、次々と国会に提出され始めた¹²。

(以上一部抜粋)

実際に川崎市では、在日韓国人に対するヘイトスピーチが2016年3月に取り上げられ問題視されている。在日韓国人が多数住む川崎市では、彼らへの差別的発言をするデモが2013年以降計12回にわたって繰り返されている¹³。国民の代表である知事が公の場で在日韓国人への差別的な発言をしたことも問題となっている。

「2016年9月1日 広島市」

HIROSIMA PEACE SITEより、ヒロシマピースボランティアの団体に電話で移動解説の申し込みをした。当日、移動解説をしてくださるボランティアガイドの方のお話を聞きながら平和記念公園内を見学した。公園内のモニュメントを見て回りながらそれが設置された背景を学ぶことができた。ボランティアガイドの方(以下、Iさんとする)は被爆者でもあったため、当時の話なども聞いた。

Iさんは、歴史はほぼ100%戦争で成り立っていると考えておられ、原爆投下から71年経った現在まで幾度となく原爆は使用されかけたが、それらが抑止されたのは広島と長崎の存在が大きいとのことである。広島平和記念資料館を出て目の前の平和大通りは今では

¹² 山崎雅弘著『戦前回帰「大日本病」の再発』(学研教育,2015年)3,4頁引用。

¹³ 『毎日新聞』(2016年3月17日発行、東京朝刊、28頁)。

フラワーフェスティバルが行われるなど華やかな通りになっているが、原爆が投下されたその日、そこでは朝から 12、3 歳の学徒隊が「建物疎開作業」¹⁴をしていた。原爆投下地点から 1 キロメートル以内のここでは作業中の 9000 人のうち 6300 人の生徒が即死した。

その平和大通りに沿って歩いて行くと「嵐の中の母子像」があり、その像の真正面に立つと、噴水、アーチ、原爆ドームが一直線に見えるように広島平和記念資料館は高床式に設計されている。1945 年当時の小学校には夏休みがなく、I さんは 3 年生から 6 年生は疎開しており、疎開から広島市へ帰って来た時に、親も兄弟も家もなく結果的に原爆孤児になったのである。

I さんの知り合いの被爆者の方の中には、5 月のオバマ大統領の広島での行動に憤りを感じている人もいと伺った。「資料館を 10 分だけ見て何が分かるのか」、「謝罪しないのなら来なくていい」という意見だった。実際に資料館を見学した際、入り口から出口まで 1 つ 1 つの展示物を見ると 2 時間半以上はかかった。このことから考えると、表面的な訪問だと思われても、仕方がないのではないかと思う。

このような解説を聞いた後、「安らかに眠って下さい、あやまちはくりかえしませぬから」という文章が刻まれている原爆死没者慰霊碑を見た。人間は通常、被害を受けたら復讐を考えるが、そこから平和は生まれない。繰り返さないことで平和が始まるという意味あいである。これは永井隆博士と同じ考え方ではないかと思う。「如己愛人」という言葉を残したことで有名な彼は自分の著書で「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか？…私達だ。おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ」¹⁵と、戦争を続けていた過ちを自覚し、戦争をやめさせるため、平和を保つために、命が擦り切れるまで執筆を続けた。戦争から平和は生み出せないと再確認した。

「禎子さんの像」については、その独特な形と顔の表情に、一見嫌悪を感じた。しかし、この像の成り立ちを教えていただくと同時に 1 つ 1 つの像や記念碑には意味が込められていることを学んだ。この像のモデルになった女の子は佐々木禎子さんで、彼女は 2 歳の頃に被爆し、12 歳の時に「原爆症」¹⁶を発症した方である。入院先の病院で鶴を千羽折ると病気が治ると教えられたことから、薬を包んでいた紙を折って病気が治ることを祈っていた。しかし、病気は治ることなく禎子さんは亡くなり、それを知った小学生の男の子が禎子さんや原爆で死んだ子を慰める石碑を作る事を提案し、それに賛同した小学生らが募金活動を行い、それによって建てられた像である。この像から、原爆症は 10 年後になっても

¹⁴ 空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊す作業のこと(広島平和メディアセンター『ヒロシマ用語集』引用)。

(http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?insight=20120828145735117_ja)

¹⁵ 永井隆『長崎の鐘』(日比谷出版,1949年) 青空文庫

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000924/files/50659_42787.html)より引用(閲覧日 2017年2月4日)

¹⁶ 原子爆弾の被爆によって生じる人体の障害。火傷などの急性障害のほか、再生不良性貧血・白血病などの晩発性障害がある(明鏡国語辞典引用)。

発症すること、なぜお見舞いなどに千羽鶴を折る事が主流になったのか学び、この像は子供が原爆で亡くなった子供のことを思いやっけて建てられたことから、今、そして未来の子供たちにとって身近に感じ、記憶に残る物になりうると確信した。



Picture 1 サダ子さんの像

「韓国人慰霊碑」は亀の像の上に建てられているが、それは、浦島太郎の話にあるように亀は幸運な場所に連れて行ってくれると信じられており、その亀が韓国の方角を向いているためであるという。盛り土は遺骨の引き取り手がいまだに見つからない七万人の人々が地下に眠っていてそれを忘れないようにするためである。

Iさんは、家の中で投下地から3キロメートルの地点で被爆しており、そこは黒い雨が一番降った場所である。投下から60年経った頃に妹さんが原爆症で亡くなられたが、60年経っても原爆によって苦しめられていることに憤りを感じていらっしやった。被爆したら普通に死ぬことさえもできないのか、死んだらすべて原爆のせいにされてしまうのかということも話されていた。

水の都とよばれる広島市は川と橋が多く、市内であるにも関わらず緑の多い綺麗な街並みであった。その緑は山や森のように自然に生えているものではなく、人間の作為によって植えられているため、広島の方たちは意識的に何かの気持ちを込めてこういう景観にしていたのではないかと思われた。今では美しい川であるが、原爆投下から5年から10年の間は川底に骨が転がっていたそうである。これは、川では多くの方が水を求めて亡くなったということの証明になるだろう。また、韓国人被爆者の方にインタビューをした際に、被爆した方が橋の下に集まって座っており、橋を通る人を凝視していたことを聞いた。これは自分の家族や親戚が通りかかる際に助けてもらうためだったのではないかと話されていた。このように川の付近で亡くなった方は水を求めて死んでいった方だけではないことを知った。

広島で原爆は「ピカドン」と呼ばれているが、その由来は「ピカッ」と光って「ドン」という音が聞こえたからだと言われているが、長崎ではほとんど「ピカドン」という表現はしないようである。概して、被爆者の方は御自身が被爆者であることを隠したがるという。旅行中にお話を伺った被爆者の4名の方は、被爆者と言わなければ、そうだとは見えないうくらい元気そうであり、「ケロイド」¹⁷などの症状も顕著に見られなかったことから、隠し通すことは不可能でもないのだろうと推測する。しかし、それでも被爆者の方が立ち上がって被爆した経験をお話になるのは、原爆を自分の子供や孫の世代に経験させたくないからだと言われている。実際に、差別、例えば結婚できなかつたり、お化けとよばれたりなどがあるという。その他、広島平和記念資料館を訪問した。資料や展示物、写真から被害の生々しさが伝わった。顔の識別もできないような火傷や、強い熱戦を指先に浴びたことにより爪と皮膚が垂れ下がり、そこから黒く変形した爪が生え続けたことなど想像を絶するような事実を展示物は伝えていた。



Picture 2 識別不能な程顔に火傷を負っている方(広島平和記念資料館にて)

「2016年9月2日 広島市」

韓国人被爆者の方（以下、Lさんとする）で当時16歳、出勤中に被爆された男性の方の講話を受けた。Lさんが被爆された時は16歳であった。韓国人であったために差別があり、学校では濡れ衣をかぶせられた挙句に教師に殴られるなど、今では問題となるようなことも当時は容認されており、父にそれを話しても「お前が悪い」と言われるだけであった。差別は受け入れるしかないような状況に追いやられていた。

原爆が投下されたその日の朝、電車で勤務していたLさんは爆心地を10分前に通過した。もし、10分遅ければ、もし、1つ降りる駅が違えば、即死であったという紙一重の場所にいらっしやう。今も御存命の被爆者の方たちは生き残ってしまったのではなく、原爆の悲惨さを伝えるために「生かされている」と思って講話を行っている方が多い。

あの時電車から降りると、向こうの家の壁が明るくなり、雲のない明るい光景から黄色の陽炎が視界に広がった。Lさんは、何だろうと考える時間が2～3秒あった。学校での訓

¹⁷ やけど・潰瘍などが治ったあとにできる、紅色または暗褐色を帯びた皮膚の隆起(明鏡国語辞典引用)。

練が身に染み付いていたため、即座に耳と目を手で押さえて伏せた。L さんの場合には他の被爆者がというようなドーンという轟音は聞こえなかったようだ。しばらく伏せていたが首を上げて周囲を見回したら真っ暗になっていた。近くにあった橋の下に行ったところ、そこには既に大人が 4 人いた。その人たちに火傷をしていると指摘されるまで自分が怪我を負っていることに気付かなかった。橋の下にいたうちの 1 人が「これは新型爆弾だ」という発言をしていたようだ。他の都市は壊滅的な被害を負う空襲を受けていたが、広島市は 1 回も空襲を受けておらず、焼夷弾の威力を知っている者は少ないため、この方は他の土地から来た人だったのではと推測していらっしやった。通常 15 年前の何でもない日のことなど覚えていないだろうが、その日のことは今でも昨日のことに覚えているようだ。

火傷には油がいいと思われており、逃げ延びた L さんの職場である機関庫には機関車の整備用の油しかなかったため、それを傷口に塗ったが、耐え難い痛みとにかく泣くしかなかった。また当時は放射能の身体に及ぼす影響が知られておらず、食糧も不足していたため、被爆したお弁当を食べたようだ。広島大学の壁に挟まれて死んでいた馬は目が飛び出していた。夕方 4 時頃から人の焼けた匂いがして、それはとにかく臭いものだった。橋の横には被爆した人が大勢座っており、渡って行く人を凝視していた。家族、親戚が通りかかって救助してくれないかと待っていたのではないかとおっしやっていた。

L さんは韓国人であることを隠して就職し、日本人として働いていたため、両親にはどこで働いているか知らせていなかった。両親は言葉に韓国訛りがあるので、職場の人にばれることを避けるためであった。L さんの母親は「息子は生きていないだろう」と思いながらも、L さんを探すために広島市内へ搜索しに向かった。自宅に帰りついた L さんは箸が立たないほど米粒が少ないご飯を食べて、眠りに就こうとしたが、あまりの痛みで眠ることができなかつた。薬を貰いに病院へ行っても「赤チン」¹⁸しかもらえなかつた。時間が経つにつれて膿が出て来て、肉が腐ってウジが湧いた。母親が取ってくれるが、あまりのひどさに「早く死ね」と泣きながら言っていたことが忘れられないようだ。

「母は泣きながら、『焼けただれて見るに忍びない顔だし、首にウジがわいて、このまま大きくなっても一人前の人間にはなれないだろう。代われるものなら代わってやるけど……。早く死ね、早く死ね、死んで楽になれよ』とつぶやいていました。母の本心ではなかつたとは思いますが、私も一緒に泣きました」¹⁹。

どんな病気でも怪我でも、家族にはできるだけ生きてほしいと思う人が多いと思うが、それでも「死んだ方がマシだ、楽にさせてやりたい」と思わせるほどの火傷だったのだ。

18 「マーキュロクロムという有機水銀化合物の水溶液の通称。『マーキュロクロム』『マーキュロ』ともいい、殺菌消毒剤に使った。名称は『赤いヨードチンキ』の意だが、ヨードチンキとは成分が異なる。『赤チン』と呼ばれる製品は、現在日本では製造中止（明鏡国語辞典より引用）。

19 李鐘根著『在日韓国人二世の被爆証言』（李鐘根発行、2014 年）12,13 頁引用。

実際資料館などで展示されている被爆者の写真を見ても、目を背けたくなるものばかりだった。原爆投下から 5 ヶ月が経ち、近所の方から食用油を貰い患部に塗ると回復に向かったという。

Lさんが訴えたいことは、こういうことである。命は平等であり、差別をすれば争いが起こる。日本では未だに移民の受け入れが少なく、Lさん自身も生まれた頃から日本に住まわれているが、未だに国から選挙権を付与されていない。日本の制度から差別意識を変えていかなければならないのではないだろうか。また、核は絶対悪であり、原爆が投下されて強制労働から解放された韓国人のうち、韓国に帰国した者は被爆者手帳を貰えていないという。

第二節 長崎での実地調査²⁰

「2016年8月9日 長崎市」

松山町平和公園での平和記念式典に参列した。長崎も広島と同様に、あまりの人の多さに入場制限がかかっており、会場内に入って参列することはできなかったため、公園内に設置されたテレビで中継を見た。テレビの周りには老若男女、色々な人が黙って画面を見つめていた。公園近くの道路ではデモの行進が行われ、「安倍は帰れ！憲法第九条改正反対！」という叫びは式典中も続き、会場付近にまで声が届いた。しかし、黙祷中はその声は一切消え、周囲も物音 1 つないくらい静まり返った時に、被爆犠牲者を追悼する気持ちはここにいるどの人も同じなのだと感じた。

長崎原爆資料博物館では資料を研究し、原爆や被爆について学び、実際の被爆物を見学した。ボランティアガイドの方に館内を案内してもらった際に、八幡製鉄所による「煙幕作戦」についてのお話を伺った。当初、原爆投下予定地は福岡の八幡であったが、視界不良で第 2 候補であった長崎市に原爆を投下した。この視界不良の原因は前日の焼夷弾攻撃による煙であると考えられていたが、実は八幡製鉄所の「煙幕作戦」による煙が一因であった可能性がでてきた²¹。この作戦は、敵機襲来の警報が鳴った際に、コールタールを燃やして煙幕をはり、視界不良にするものであった。8月6日に広島市が「新型爆弾」で壊滅したことを聞いていた工場の従業員らは、八幡製鉄所の他に小倉の兵器工場などもあったため「次はこっちだと考えていた」という²²。この事実が 70 年近く経つまで公にならなかったのは、八幡の代わりに原爆を投下された長崎の犠牲者らがいたからだと考えられている。

映像資料において、外国人被爆者の方の証言をきいたことにより、日本人と外国人では原爆に対する考え方が違うことが一層明確になった。強制労働を強いられていたオーストラリア兵捕虜の方は、「原爆は苦しい日々を終わらせてくれたものであり、アメリカが原爆

²⁰ 山口彊著 『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』(朝日文庫、2009)

²¹ 「長崎原爆：投下の日『煙幕』八幡製鉄所元従業員、69年の苦悩告白」、『毎日新聞』(2014年7月26日発行、東京朝刊、29頁)

²² 同上

を落としたことは正しかった」と語った。オーストラリアから送付された食糧や医療品は彼らには与えられず、病気や肺炎になったら最後、死ぬしかない捕虜生活は、被爆体験よりも厳しいものだったからだ。そのため、「原爆は耐え難い捕虜生活に終止符を打った。戦争が続くよりも原爆投下の方が犠牲者は少なく済んだのではないか」と考えるのである。その他、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、岡まさはる記念長崎平和資料館を訪問した。

「2016年8月29日 長崎市」

平和記念公園・記念碑、グランド・ゼロ、浦上天主堂跡、平和祈念像を巡検した。その他、長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)にて教授にインタビューを計画していたが、今回のレポートのテーマに沿う研究をなさっている先生がいらっしゃらなかったため断念した。

「2016年8月30日 長崎市」

山里小学校は爆心地から700メートルの位置に存在し、1581人(昭和20年6月30日時点)のうち、およそ1300人が被爆により亡くなられた。原爆資料室や防空壕があり、原爆資料室では当時使っていたものや、小学校の様子などを常駐ガイドの方にお話を伺いながら調査した。小学校の先生も男性は軍隊に入れられたので、学校にいるのはほとんど女性の方だった。展示されていたもんぺや救急袋には学校名、学年、名前、住所のほか血液型も記されていた。戦争時の男性の国民服のイメージは黄土色であったが、それは敵に見つかりにくいようにするためである。

その後永井隆記念館を訪問した。永井博士の生涯と、原爆と戦争に対する向き合い方を学んだ。そこにある一つ一つの言葉が心に残るものだった。

「あの活気にあふれていた町を大火葬場にし、一画の墓原にしたのは、だれだ？ ……私達だ。『剣をとるものは剣にて滅ぶ』との戒めを冷ややかに聞き流し、せっせと軍艦を作り、魚雷を作っていた私達市民なのだ」²³。

「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか？ ……私達だ。おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ」²⁴。

どんな状況下でもできることがあり、戦争を無くすにはまずは私たちから戦争をやめなければという精神をもつ人であった。

²³ 永井隆著 『花咲く丘』(中央出版社,1976年) 276頁引用

²⁴ 同上。



Picture 3 被爆したマリア像(<http://www.natsunoinori.com/keyword/>)

浦上天主堂を訪問し、資料室で被爆したものを調査した。被爆したマリア像を見た時に何とも言えないおぞましさを感じた。あの像は人間の目が光線で傷めやすいことを体現しているのではないだろうか。

その後、城山小学校の資料館を訪問し、常駐ガイドの方の案内を受けながら館内を探求した。それは、実際に被爆して燃えた校舎の一角をそのまま残して資料館にしたものである。学校の入り口などには小学生の手書きで、こちらの小学校が被爆地付近であり、多くの小学生らが亡くなったことなど紹介する張り紙があり、平和教育が盛んであることを実感した。被爆した校舎の模型も展示されていた。防空壕の穴は掘りやすいように崖に作られており、頑丈さはないため、奥は崩れやすく手前は火災の被害に遭いやすい。爆風によって木がなぎ倒されているイメージが強かったのだが、この学校の模型は直立しているものが多かった。爆風による被害は中心部よりも周辺が被害が大きく、これらの木々は爆心地から 500m の距離にあり、真上から爆風を受けたため直立したまま被爆したのであった。振袖の少女というお話がある。これは原爆資料館にも展示されている。当時、化粧やお洒落をすることは贅沢であり、贅沢は敵だと言われた時代であるため敬遠されていた。少女の母親が、原爆により幼くして死んでしまった我が子にせめてと思い、化粧をして火葬したのを見ていた方が絵に描いたものである。

その他、ボランティアガイド(ピース・ウイング長崎)を利用して、原爆投下中心地、山王神社、長崎大学医学部門柱、浦上天主堂、平和公園を説明を受けながら見学する予定であったが、申込手続きの不手際があり、個人で見学した。また、無窮動を訪問する予定であったが、時間の都合と優先順位を考えた結果、省くことにした。

「2016年8月31日 長崎市」

「ピース・ウイング長崎(公園財団法人)」を通して申し込んだ方に平和祈念館でインタビューをした。その方(以下、Nさんとする)は、16歳で勤務中に被爆された。1対1だったため、質問もしやすく、当時の様子を研究することができた。例えば、「鏡飯(かがみめし)」、「蛍飯(ほたるめし)」、「振り飯(ふりめし)」など、当時使われていた言葉を知ることができた点、投下間近の時は警報が頻繁に発令されていたため、学校に行けなかった

点、当時小学三年生だったNさんは兄弟がいなかったため、不定期に行われていた寺での勉強会で同年代の子に会えることが楽しみだったという点などである。

Nさんは金比羅山の麓の投下地から3km地点で被爆された。1931年から15年戦争が始まり、序盤は日本が有利な状態だったため着物を着ることができ、祭事も行われており、食事も不自由なくとれた。しかし、1941年にはじまるアジア太平洋戦争から日本国家全体が戦争中心に変化していくのを身を感じたという。小学校は、子供も国民として国を守るようにと国民学校と改名された。そして教師からは「よく学び、強い体を持ち、兵隊さんになりましょう」と教育された。それが当然であった。戦争をしたくない、戦争に反対する気持ちがあっても、反対することはできなかった。それを表明し、兵隊の召集を拒否した男性は拷問を受け、自殺をし、その家族も竹あらいというもので家を囲まれて出られない状態にされ、餓死させられたということもあった。

戦時中には3つの警報の種類があり、状況により使い分けられた。

1. 通常の「警報」では外に出ることができる。
2. 「空襲警報」は外に出ることを禁止され、夜は電気をつけることもできない。当時、どの家庭にも防空壕があり、空襲警報が鳴った時はそれに入るように指導されていた。
3. 「敵機来襲」というものは、家の防空壕では生き延びることができないので、街の大きな防空壕に逃げることになる。

広島と長崎の原爆投下前には警報が発令されていたが、敵機が2,3機程度(通常は10機以上)であり、視察に來ただけで空襲はしてこないだろうと判断され、警報は解除された。そのため多くの人々が出勤、登校をはじめた頃に原爆が落とされ、直接被爆した者が多くなった。

食事は配給制であり、初めの頃はお米がもらえた。しかし、戦争が激しくなってくると百姓も戦場に駆り出され、稲作をする人がいなくなり、米不足が深刻になる。警報が鳴ると外に出られなくなるので、食糧不足は更に深刻化した。戦争も終盤になると米よりも汁の量が多いものを食べており、下記の三種類のご飯があったという。

1. 汁に自分の顔が反射するものは、「鏡飯」と呼ばれた。
2. 汁に数粒の米を浮かばせたものが蛍に似ているものは、「蛍飯」と呼ばれた。
3. 母親が子供に少しでもご飯を食べさせるために、自身は食べた振りをして子供に与えたことから、「振り飯」と呼ばれるものもあった。

それほど食糧が不足していたのだが、長崎市の「山里小学校」のHPに掲載されている岩永衣伊子先生のお手紙の中でこう記されている²⁵。

²⁵ 山里小学校HP「岩永衣伊子先生からのお手紙」より引用(閲覧日2016年10月25日)。
(<http://www.nagasaki-city.ed.jp/yamazato-e/05%20heiwa/01%20hibakuki/iwanaga%20seisei.htm>)

「(学校の) 門の所を通る時、右下にあるプールのそばの校舎の地下室にある倉庫からゴーゴーとすごい音をたてて何かが燃えている音が聞こえてきました。その時点では先生方全員には知らされていないのですが、それは非常食用として保管されていた、国か県の950俵もの米であったこと後日知り、『欲しがりません、勝つまでは』を合言葉にお腹ぺこぺこで頑張ったみんなの気持ちを思い涙が出そうでした」。

この手紙に基づくと、食料がないことはなかったのではないかと推測できる。『はだしのゲン』の作中では、先生や身分の高い人々はお腹いっぱい米を食べている表現があったからである²⁶。

Nさんによると、最終的には米の配給がなくなり、調理もまともにできないような豆粕が配られて、それで食いつないでいたが、雑草や蛙、ネズミを食べていた人もいたことから、豆粕が食べられるだけマシだったとNさんは語った。原爆が落ちたその日、「何？」と思う間もなく、辺りが赤、黄、白くなりドーンという轟音になった。何かあったら防空壕に逃げるように教え込まれていたため、近所の防空壕へ逃げ込んだ。原爆とは知らなかったため、皆が近辺に大きな爆弾が落ちたと思いこんでいた。9月になって初めて原爆と分かった。金比羅山を越えて来た被爆者たちは、真っ黒になっていて、少しずつこちらに近づいて来る時は、集まっていた近所の者、皆が黙って固まっていた。この山は366メートルあり、途中には220段の階段があった。被爆した後にこれらを越えて来るのは極めた困難なことであり、それができたのは、命の保証がない時代であったにもかかわらず、生きていたい、家族に会いたいという気持ちが強かったからではないかとNさんは推測しておられた。慕っていた近所のお兄さんは背中じゅうにガラスが突き刺さっており、近所の方々がそれを箸で取っていたという。しかし、奥にまで刺さった破片はなかなかとれず、取ると鮮血がピューと吹き出していたそうだ。広島平和記念資料館で見た展示物のなかに実際のガラスの破片があったが、思っていたよりも細かい破片であった。今もなお、体の中にガラス片が残っている被爆者の方もおられるという。

次の言葉は特に心に深く残るものだった。

「原爆による犠牲者は、被爆者の方がいなくなるまで増え続ける。原爆を無くすため、使わせないためには戦争をしないこと。戦争をしないためには、今の平和を大切にすること。今は平和のように見えるが本当の平和ではない。昔はゆっくり眠れること、ご飯が食べられること、生きることに喜びを感じていたが、現代ではそれが薄れつつあるように感じる。」

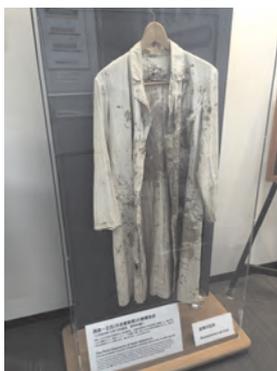
さらに、次の世代への三つの「お願い」も伺った。

²⁶ 中沢啓治作『はだしのゲン』第1巻(汐文社,1975年)127頁参照。

1. 1人1人は地球上に1つしかいない、粗末にしないで。
2. 差別をしてはいけない。命の重さは同じ。
3. 問題は話し合いで解決しよう。

Nさんを含めて他の被爆者の方は、憲法第九条の改正は絶対にさせてはいけないと訴えられた。

旧長崎医科大学(現長崎大学坂本キャンパス)内の原爆医療資料展示室や被爆した配電室、門柱を訪問した。特に原爆医療資料展示室では原爆による人体への影響を研究することができた。配電室は被爆したものをそのまま残してあったためか、独特な雰囲気があった。コンクリート造りの建物があの爆風で吹き飛ばないくらい頑丈であることが分かった。教室では授業中だったので生徒は並んで座ったまま白骨化したという。原爆医療資料展示室では当時医大の学生であった西森一正氏(2000年逝去)の血染めの白衣が展示されてあった。ガラス片によって30ヶ所の傷を負い、その傷による出血で染まったものである。



Picture 4 西森一正氏の血染めの白衣

山王神社の鳥居とクスノキを見たが、この研究旅行でクスノキは大変感動的であった。写真で見ると実際に見るのとでは全く違うと実感した。被爆したとは思えないほど立派に育っており、神々しい2本の木であった。右のクスノキには空洞ができておりガラス片などが残っていた。鳥居は、思っていたよりも小さく、街の風景になじんでいるが、この鳥居はあの原爆を経験して今もここにあるということに感動せずにはいられなかった。



Picture 5 被爆直後のクスノキ

(http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/710000/715000/p025433_d/img/006.jpg)



Picture 6 現在のクスノキ

(<http://nagasaki-machineta.blog.fc2.com/blog-entry-2450.html?sp>)

結論

第一節 研究の成果

8月の広島と長崎は朝から強い日差しと熱気で憂鬱になるほどであった。原爆が落とされた同じ時間、同じ場所を歩いてみて、本当にこの場所に落とされたのだろうかと思うほどに美しい街並みであった。しかし、実際の被爆者の生の声を聞き、資料館で学ぶことで現実感が増し、過去と現在を照らし合わせながら実地研究を進めることができた。それは今後の研究への刺激となり、原爆や戦争を繰り返さないためにできることを考え、学ぶことに繋がった。

式典では、71年経った今でも世界各国から多くの人を集めるほどの影響力のある出来事であったことを実感した。黙祷で皆が沈黙することで、祈る気持ちは同じであると教えられた被爆者の方へのインタビューでは、実際に被爆体験を生で聞くこと自体、強く印象に残る出来事となった。文献の中だけの話ではなく現実に遭ったことなのだと心に銘記した。71年間、戦争がなかったのは被爆者たちの懸命な努力もあっただろう。これからは

戦争を経験した世代が少なくなる。私達の世代が抑止力を生み出していかなければ、世界は再び戦争へと動き出してしまいうだろうと私は考えている。

71年間で、広島と長崎の原爆は世界の人々にどれくらい知られたのだろうか。一時期よりも核兵器の数は減ったが、それでも核兵器のない世界には程遠い。地球を何度も滅ぼす可能性のある核兵器を所有する国の国民は、今一度原爆について学び、使用反対を訴えかけてほしいと感じた。アメリカは、71年前の原爆投下は正当だった、不当だったということに関係なく、原爆という兵器はすべての人の生活を一瞬にして壊し、生き残った人々でさえ絶望に追いやるもだということを経験する必要があるのではないだろうか。

今回、研究旅行を通して原爆について実地研究したが、被爆による人間への影響は目を背けたくなるものであった。実際に修学旅行で原爆資料館を訪れていた中学生は、展示してある死体の写真などを見て嫌悪感を示していた。一瞬にして人間をそんな姿に変えてしまう物を作ってしまったのは人間であり、使用したのも人間であるが、救助や助けの手を差し伸べたのも人間であることを強調しておきたい。

第二節 今後の展望

今後、アメリカから見た原爆投下や投下に関する認識について研究していきたいと考えているため、この研究旅行を通して日本人から見た原爆投下を深く理解することができた。これからは文献と照らし合わせ、核兵器とどう向き合っていくのかを研究、考察をしていこうと思う。

今回日本での実地研究が実現したので、今後はアメリカでの研究もしてみたいと考えている。また、在日韓国人の方の被爆体験や戦時中の生活、日本人でないことに対する差別などのお話を直接聞くことで新しい発見があり、まずは自分が差別をしていないかと省みる機会となった。このことから強制労働を強いられていた被爆者の方や非国民と呼ばれていた方にもお話を伺って、理解を深めたいと思っている。被爆者の方の高齢化に伴い、実際に八幡の製鉄所による煙幕作戦は証言できるだろうと考えられている方が既に亡くなられており、原爆の体験が風化しつつあることを身にしみて感じた。早く行動に移す必要性があるだろう。

式典でのデモや被爆者の方が、憲法第九条の改正に反対しておられたので、今一度この憲法を改正することによる問題点を学び、日本が戦争に加わることを防ぐ行動をとりたいと思う。

参考文献

- ・李鐘根（イ・ジョンゴン）『在日韓国人二世の被爆証言』（私家版、2014年）
- ・飯島宗一・具島兼三郎・吉野源三郎（編）『核廃絶か破滅か：被爆30年広島国際フォーラムの記録』（時事通信社、1976年）
- ・池上彰『池上彰の現代史授業 21世紀を生きる若い人たちへ 昭和編① 昭和二十年代

戦争と復興』(ミネルヴァ書房, 2014年)

- ・栗林輝夫『原子爆弾とキリスト教 広島・長崎は「しょうがない」か?』(日本キリスト教団出版, 2008年)
- ・原爆慰霊碑を正す会発行『原爆慰霊碑を正す』
- ・中国新聞 2016年8月6日特報1面
- ・マイケル・D・ゴードン『原爆投下とアメリカ人の核認識: 通常兵器から「核」兵器へ』(彩流社, 2013年)
- ・桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』(せりか書房, 2002年)
- ・桜井厚・山田富秋・藤井泰(編)『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』(せりか書房, 2009年)
- ・下関原爆展事務局(編集)『原爆と大戦の真実』(長周新聞社, 2008年)
- ・中沢啓治『はだしのゲン』[全10巻](汐文社版, 1973-1985年)
- ・日高義樹『なぜアメリカは日本に二発の原爆を落としたのか』(PHP研究所, 2012年)
- ・平原春好(責任編集)『原爆をどう教えたか』(日本図書センター, 2006年)
- ・本島等・森村誠一・柴野徹夫『私たちは戦争が好きだった: 被爆地・長崎から考える核廃絶への道』(朝日新聞社, 2000年)
- ・八幡煙幕作戦に関する新聞記事
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20160927105640521gsh-ap03>
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20160927105640521gsh-ap03>
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20160927105640521gsh-ap03>
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20160927105640521gsh-ap03>
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20160927105640521gsh-ap03>
- ・山口彊『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』(朝日文庫, 2009年)
- ・山崎雅弘『戦前回帰「大日本病」の再発』(学研教育, 2015年)
- ・Walter L. Hixson (ed. & intro.), *The Atomic Bomb in History and Memory*, [The American Experience in World War II], (Routledge, 2003)

参考映像

- ・沢啓治原作『はだしのゲン』アニメ映画(ゲンプロダクション, 1983年・1986年) / テレビドラマ(フジテレビ、ファインエンターテイメント, 2007年)
- ・スティーブン・オカザキ監督『ヒロシマナガサキ』(「二重被爆」製作委員会事務局, 2006年)